〔東京家政大学博物館紀要　第8集　p.17～27, 2003〕

童画家　深沢省三
—その生涯と作品—

髙橋　裕子

Shozo Fukazawa, as Illustrator of Picture Books for Children
—His Life and Works—

Yuko TAKAHASHI

Ⅰ．研究目的

近年、絵本の世界では、「絵本原画展」が各地で盛んに催されるようになってきた。これは、ただ単に物語を説明するだけの挿絵としか考えられてこなかった絵本の《絵》が、独立した一枚の《絵画》あるいは《イラスト》として、その芸術性が認められつつあるという証拠と考えられる。原画展に出向き、自分のよく知っていた絵本の原画に初めて触れると、印刷機を通ってきた平板な絵とは全く異なった世界を経験させられる。その風合いの豊かさやいきいきと迫ってくるドラマに感動させられ、驚かされるのである。

日本と違って西洋（イギリス）においては、産業革命によって印刷技術が飛躍的に進歩し、それに伴って、近代的な子どものための本が初期の段階から、どちらかといえば《画家》が主体で制作されてきた。そこには、E・エヴァンズ[注1)]という絵画に深い見識を持つすぐれた編集者の存在があったことを見逃すことはできない。印刷業者であった彼は、才能ある挿絵を描く三人の画家[注2)]を見出し、それぞれの個性にあった絵本を出版したのである。エヴァンズは、子どものための本にとっての挿絵の重要性をはじめから理解していたのである。

一方、日本においては、ことばが主体で、挿絵はどちらかといえばただ単に文章を説明するものと考えられてきたという歴史がある。その一因として、大正期の童心主義のもとに生まれた児童文芸雑誌「赤い鳥」が、自身が作家であった鈴木三重吉によって主宰され、その執筆者に当時の著名な文豪が起用されたという事があげられる。残念なことに、挿絵は文章の添え物としてしか捉えられていなかったために、若い新進気鋭の画家達が心血をそそいだ原画がほとんど消失してしまった。そのことが、後世、挿絵の芸術性を見直す際の大きな障害となっている。

ここで、「赤い鳥」の挿絵を担った三人の画家[注3)]の一人「深沢省三」に注目し、消失してしまった原画に想いをはせながら、その人生を振り返り、その作品を再発見することにこの研究の目的をおく。

児童・保育　教育・保育実習研究室

Ⅱ．研究方法：文献研究

Ⅲ．考察

1．時代背景

日本において、本当の意味での子どものための近代的な絵本の始まりは、絵雑誌「コドモノクニ」（東京社1922年創刊）と考えられる。しかし、その萌芽は、大正デモクラシーの時代、自由教育運動のもとで生まれた鈴木三重吉の「赤い鳥」（赤い鳥社1918年創刊）に 見ることが出来る。

この時代は、これより先、ヨーロッパでは、戦争（第一次世界大戦）の苦悩が社会に大きな影響を与え、時代を急速に動かしつつあった。従来の生活感や原理が反省されると同時に、精神の自由、個性の解放、理想の追求等がさまざまな立場から要求され、教育の世界では、ルソーやペスタロッチの教育説が再評価されることになり、児童中心の教育が強く主張されはじめたとされる。

桑原によれば、「この世界的傾向が日本をみまったのが、丁度大正七年を中心とする数年間だったのである。新教育は『自由画の運動、文学教育の運動、自由教育の運動』としてあらわれ、具体的には、私立の成城小学校や、自由学園の設立、小原国芳の『全人教育論』、片上伸の『文芸教育論』、芦田、友納綴方論争等が、形式主義、画一主義の打破、児童解放、個性と興味の尊重、創造性の重視等の方向に時代を先導していったのであった。そして、『赤い鳥』は期せずしてこの流れに乗じ、自ら推進の役割を果たすことになったのである。」[1)]と述べている。

こういった時代背景の下で、雑誌「赤い鳥」を主宰した鈴木三重吉は、その創刊の趣旨を「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」と題した印刷物で

「…世間の小さな人たちのために、芸術として価値ある純麗な童話と童謡を創刊する最初の運動を起こしたいと思ひまして、月刊雑誌「赤い鳥」を主宰刊行することにいたしました。…」[2)]

とのべ、質の高い「童話」を子どもたちに提供しようとした。そして、童心主義のもと、「赤い鳥」に影響を受けた、多くの子ども向け文芸雑誌が、つぎつぎと登場した。「お伽の世界」（1919年９月創刊）「金の船」（1919年11月創刊）「童話」（1920年４月創刊）などである。これらの雑誌は、童話・童謡を中心としたいわゆる文字主体の雑誌であったが、数年後には、文字の読めない幼年期の子どもたちを対象に、より理解しやすくしようと、質の高い絵を中心とした幼年絵雑誌が生まれた。それが「コドモノクニ」（1922年１月）であった。まさに、大正デモクラシーの時代、児童中心主義の教育思想を基盤にして、絵雑誌が誕生し、挿絵を担った若い画家達の黄金期の到来であった。

しかしそれは、時代的には、夢のようなほんの一時期で、それは、次のような言葉で表現されている。

「数多くの画家たちが童画という新しい世界に関わり、夢と理想に満ちた日本の子どもの本

の黄金期を築き、後に多くの財産を残した。それは迫りくるファシズムの足音を間近に、ほんの一時、子どもの本の理想を理想として結実させて希有な時代であった。」[3)]

2.「童画」と「赤い鳥」

上　笙一郎は、児童出版美術の様式を次のように分類している。

「…児童出版美術は、主として児童図書や児童雑誌の表紙絵・口絵・挿絵・飾絵として展開したが、明治期より第二次世界大戦後の現在にいたる間に、いくつかの様式を形成した。その様式は大まかに数えると三つであって、第一は少年層を対象とする密描挿絵様式であり、雑誌「少年倶楽部」に拠った伊藤彦造、樺島勝一、齋藤五百枝などによって開拓され、第二は少女層を対象とする抒情画様式で、雑誌「少女画報」や「少女の友」などに筆をふるった蕗谷虹児、加藤まさを、中原淳一などの手で確立された。これに加うる第三が、男女を含めての幼年層を享受者とする省略・誇張法主軸のスタイルであって、童画の名をもって呼ばれ、大正中期の童話雑誌「赤い鳥」に胚胎し、大正後期の絵雑誌「コドモノクニ」において成熟したといって差し支えない。」[4)]

「童画」という言葉を最初に使用したのは武井武雄で、1924年（大正13年）銀座資生堂で開かれた「武井武雄童画展」においてであったとされている。この言葉は、「日本童話協会」の発足によって確立した。日本童画家協会は、1927年（昭和２年）武井武雄・岡本帰一・川上四郎・清水良雄・初山滋・村山知義・深沢省三の七名によって結成された。

設立当時の様子を武井武雄が振り返ってこう語っている。

「そのころ（《コドモノクニ》創刊の頃）からですよ、だんだんに、子どもの絵に一所懸命力を入れる人が出て来はじめたのは。最初は、「赤い鳥」に清水良雄、「金の星」に岡本帰一、「おとぎの世界」に初山滋、「童話」に川上四郎、「良友」に村山知義といったぐあいに、それぞれの雑誌に拠ってばらばらに力を発揮していた。誰も彼も立派な仕事をしているのに、当時わたしたちの絵は、〈童謡画〉とか〈童話さしえ〉とか言われ、文学にたいする隷属物のように見られていました。これではいかん、何とかして子どものための美術の主体性を確立しなくてはならんと考えたすえ、わたしは個展を開くことにしたんです。」[5)]

このように、「童画」という言葉は、童話・童謡が主体で文章中心の児童文芸雑誌や絵雑誌が次々と創刊されるなかで、挿絵（イラストレーション）の重要性を主張し、画家達が、自分達の地位や仕事に正当な評価と社会的な認識を求めた結果生まれたのである。

また、上　笙一郎は、「赤い鳥」が「童画」の成立に果たした役割をつぎのように述べている。

「色感や線描の近代的な洗練度において卓越していたばかりでなく、その素材や題材や主題においても合理的であり、また、子どもの信条にもそれなりの考慮をはらっていた。そのためにわたしは、この童画の誕生に拠って日本の児童出版美術に近代が成立したとすることが出来るのであり、童画に舞台を提供した『金の星』『童話』『おとぎの世界』『コドモノクニ』など

の諸雑誌のさきがけとなった『赤い鳥』を、童画の開拓者とみなすのである。」[6)]

「童画家」とよばれる画家には、上記の「日本童画家協会」設立メンバー七人の他に、鈴木淳・深沢紅子・本田庄太郎・耳野卯三郎がいる。又、昭和に入って鈴木寿雄・安泰・松山文雄・林義雄・井口文秀・黒崎義介・川島はるよ・前島とも等があげられる。

3．童画家「深沢省三」の略歴

「日本童画家協会」の設立に参加し、「童画」の確立者の一人であった深沢省三の略年表を作成した（表１）。年表は、「深沢省三画集」（1989年11月）掲載の略年表を基に、子どもの本に関係する項目を中心にまとめ、他に本研究の参考文献から、省三が描いた挿絵、絵本等について拾って加えた。尚、「子供之友」「赤い鳥」「コドモノクニ」に掲載された、表紙絵・口絵・挿絵・飾り絵については、その数が多く記述しきれなかった。それらについては、今後の研究の機会にくわしく掲載する予定である。

表１　深沢省三の略年表

西暦（年号）	年齢	本譜・作品	備考（子どもの本関係）
1899年（明治32年）	１歳	３月24日岩手県盛岡市本町に、父忠助、母とみの次男として生まれる。生家は、南部藩より続いた米屋であったが、省三が生まれた当時、父は缶詰工場を経営していた。	1900年「幼年世界」創刊 1902年「少年界」「少女界」創刊
1906年（明治39年）	７歳	岩手師範付属小学校に入学。	1907年小学校令改正、義務教育６年制となる。
1908年（明治41年）	９歳	日詰の小学校に教員をしていた姉より、名古屋コーチンの雛をもらい、その飼育に夢中になる。その後も、七面鳥・軍鶏・猫・犬・牛などを飼い、一人で世話をする。とくに、軍鶏にたいする思い入れは晩年まで続き、多くのデッサン・岩彩を残す。	
1913年（大正２年）	14歳	４月、県立盛岡中学に入学。同級に久慈次郎・久保田禎・上級に宮沢賢治・工藤慶太郎がいる。この年東京美術学校を主席で卒業した五味清吉のデッサン講習会に参加する。この頃から、親友の久慈・久保田とともに水彩画に没頭するようになった。	
1914年（大正３年）	15歳	上級の工藤慶太郎の白羊会展出品作、牛をモチーフにした水彩画に強く感銘する。この頃より久慈と二人で野球部に入り、球技に熱中する。「子供之友」婦人の友社より創刊・「現代名作選集」鈴木三重吉出版・「少年倶楽部」大日本雄弁会（講談社）より創刊・「コドモ」木本平八郎（コドモ社）より創刊	「子供之友」（婦人之友社）・「少年倶楽部」（講談社）・「コドモ」（コドモ社）創刊 第一次世界大戦起こる
1917年（大正６年）	18歳	３月、盛岡中学校卒業。久慈と一緒に早稲田に進み野球を続けるか。画家を志すか、進路にまよう。　９月、清水七太郎を頼って上京、清水の下宿する本郷弥生町の弥生館に仮寓して、本郷弥生町の川端画学校に通う。藤島武二の指導を受ける。同校で佐伯祐三と出合い、以来、交友を結ぶ。	
1918年（大正７年）	19歳	４月、東京美術学校西洋画科、藤島武二の教室に入学。同期生に佐伯祐三、３年上に武井武雄らがいた。７月、夏休みに盛岡へ帰省、久保庄本店で創刊されたばかりの「赤い鳥」をみて、その挿し絵に感動する。この年、生家の倒産で仕送りを絶たれる。	「赤い鳥」創刊表紙画・挿絵を清水義雄が担当11月号より鈴木淳が加わる 第一次世界大戦終了
1919年（大正８年）	20歳	秋、清水七太郎から清水良雄を紹介され、翌年５月号より「赤い鳥」に挿し絵を描く。この頃、清水良雄は、三重吉の依頼で挿絵を描ける人材を探していた。鈴木淳に続いて、清水七太郎も「赤い鳥」に２度挿絵を描いている。	「赤い鳥」一周年を記念して「赤い鳥音楽祭」を開催「金の船」（後の「金の星」）創刊
1920年（大正９年）	21歳	５月、４巻第５号「天狗のお仲間」より、「赤い鳥」に挿し絵を描く。秋、夏休み一ヶ月かけて、盛岡市神子田裏のススキと雲を描いた油彩画「九月」が、第二回帝展に初入選する。	「童話」創刊

1921年 （大正10年）	22歳	6月、「赤い鳥」の音楽会開かれる。閉会後の酒席で、初めて鈴木三重吉に会う。それ以前は、清水良雄を通して、もしくは手紙で挿絵の指示をうける。秋、エンドウ畑の風景を描いた油彩画「裏」を帝展に出品、再入選する。	
1922年 （大正11年）	23歳	秋、同郷の四戸紅子と学生結婚。目白の学習院馬場裏の貸間に住む。12月、目白狐塚の貸家に引っ越す。この頃から、鈴木三重吉が頻繁に尋ねてくるようになる。	「コドモノクニ」創刊
1923年 （大正12年）	24歳	3月、東京美術学校を卒業、同月妻紅子も東京女子美術学校を卒業する。7月、長女陽子生まれる。英語教科書クラウンリーダー」の挿絵を描く。9月1日関東大震災。	「コドモアサヒ」「少女倶楽部」創刊
1924年 （大正13年）	25歳	5月から7月まで、盛岡中学時代の恩師の招きで、中国青島・済南方面へ写生旅行をする。秋、東京都北豊島郡長崎村に転居する。 「くま」「落ちた神鳴」（赤い鳥口絵）	『世界童話大系』（23巻）刊行始まる
1925年 （大正14年）	26歳	1月、長男龍一生まれる。4月、清水七太郎の後任として、上野の岩倉鉄道学校図画教師となる。2年間在職。	村山　知義、日本プロレタリア文芸連盟設立
1926年 （昭和1年）	27歳	春、板橋区中丸の文化住宅に転居。	『日本童話選集』全6冊（童話作家協会編）刊行
1927年 （昭和2年）	28歳	武井武雄・岡本帰一・初山滋・村山知義・清水良雄らと日本童画家協会を設立。この頃より「コドモノクニ」（東京社）・「コドモノエホンブンコ」（普及社）・「子供之友」（婦人之友社）などの、童画を盛んに描くようになる。「うららか」「花」「虫かご」「テニス」「高原遊馬」「サンタクロース」（赤い鳥表紙絵）「隣の窓」「狼のむれ」「マンドリン弾き」「池のほとり」「人魚」「天使」「夜みち」（赤い鳥口絵）	『未明童話集』全5冊（丸善）『日本児童文庫』（アルス）『小学館全集』（興文社）「キンダーブック」創刊
1928年 （昭和3年）	29歳	3月、次男門太生まれる。同月、銀座三越で日本童画家協会第一回展開催。「凍ったクジラを助けよう」を出品。「支那服」「春光」「五月」（赤い鳥表紙絵）「クマ吉とペンギンチャンノアフリカ旅行」（コドモノエホンブンコ）「面白い数学」（日本児童文庫）	「赤い鳥」を大型本に改める「コドモノエホンブンコ」（誠文堂）20冊刊行
1929年 （昭和4年）	30歳	7月、清水良雄が病中のため、「赤い鳥」の挿絵の大半を描く。「竜宮の使」（赤い鳥表紙絵）「シシマヒ」「浦島太郎」「嶋のお花見」「シロクマノクルシミ」「イソアソビ」「口絵」「クマノモチツキ」（コドモノクニ）「僕の乗物」「ナラン山の梨の木」（コドモノエホンブンコ）「グリム童話集」「珍しい動植物」（日本児童文庫）「黒い騎士（世界童話1）」（春陽堂）	「赤い鳥」休刊 世界恐慌始まる。
1930年 （昭和5年）	31歳	2月、吉祥寺にアトリエを建て、転居。4月、3男武蔵生まれる。「ころがっているサンタクロース」（子供之友）「羽根つき」「口絵」3月号・11月号「動物のお花見」「ホタル」「色鉛筆のかいた兎」「キューピーチャン」「デンキ」「ガードの工事」「輪投げ」（コドモノクニ）	「赤い鳥」復刊のため、与田準一が赤い鳥社に入社 童謡同人誌「乳樹」創刊岡本帰一永眠
1931年 （昭和6年）	32歳	「雪の風景」「ロボットのはなし」（子供之友）「お猿の曲芸」「キツネのお話」「猫の夢」「ツエッペリン」「デパートの屋上」（コドモノクニ）「日本の国旗」「ロビンフッド物語(1)」「ロビンフッド物語(2)」（赤い鳥）	「赤い鳥」会員制にして復刊
1932年 （昭和7年）	33歳	「おふろ」（子供之友）	
1933年 （昭和8年）	34歳	この頃大連・ハルピンなどを写生旅行し、各地で展覧会をする。「ちょうちょうとばら」（子供之友）「子馬の話」「ずるやすみ」（赤い鳥）「自転車」（コドモノテンチ）	北原白秋「赤い鳥」と絶縁 宮沢賢治永眠「コドモノテンチ」（子供の天地社）創刊
1934年 （昭和9年）	35歳	「プールへ行きました」「毛を染めかえたおねこさん」（子供之友）「ミュンヒ男爵冒険談」（赤い鳥）	
1935年 （昭和10年）	36歳	7月、坪田譲治◇「魔法」（建文社）の装幀をする。「トマト」「鳩」（赤い鳥表紙絵）「子犬」（赤い鳥）「4月1日」（子供之友）	
1936年 （昭和11年）	37歳	6月、鈴木三重吉の病死により「赤い鳥」（八月号）を最後に終刊、童画創作の張りを失う。「ゆきあそび」「おふろ」（子供之友）	「赤い鳥」3月号を「赤い鳥鈴木三重吉追悼号」とし終刊
1937年 （昭和12年）	38歳	「のねずみの土の中のめぐり」（子供之友）◇「裏町の人形使い」◇「七階の子どもたち」（塚原健二郎童話集）	「コドモノヒカリ」（子供研究社）
1938年 （昭和13年）	39歳	6月、従軍画家として蒙古に渡り、終戦までの7年間、張家口を中心に絵画制作に励む。	

1942年（昭和17年）	43歳	「蒙古みやげ」（子供之友）	1940年武井武雄『新児童文化』第一冊に「童画史意見」を発表
1943年（昭和18年）	43歳	12月、次女泉生まれる。「豚を飼う子供たち」（子供之友）	1941年少国民文化協会の結成に伴い、日本童画家協会を解散
1944年（昭和19年）	44歳	◇「ボクノツクッタミチ」（小国民絵文庫）	1943年～1947年「小国民絵文庫」全７冊（中央出版協会）
1945年（昭和20年）	46歳	８月、日本の敗戦で、描きためた多くの作品を残し、張家口を脱出する。12月、敗戦の混乱の中を帰国。家族の住む盛岡へ帰る。	
1946年（昭和21年）	47歳	児童対象の日曜図画教室の指導にあたる。岩手県岩手間郡雫石町横掛に入植、開拓にあたる。	日本童画会結成
1948年（昭和23年）	49歳	岩手県立美術工芸学校設立され、教授に就任。盛岡に転居。	
1949年（昭和24年）	50歳	６月、新制美術会設立。その代表になる。10月、第２回岩手日報文化賞を紅子とともに受賞。	
1951年（昭和26年）	52歳	岩手県立盛岡短期大学の開校にともない、紅子とともに美術工芸科教授となる。	
1956年（昭和31年）	57歳	岩手県立短期大学美工科が廃止され、岩手大学学芸学部に特設美術科が開設、教授となる。	1954年清水良雄永眠 1958年鈴木淳永眠
1962年（昭和37年）	63歳	11月、盛岡市勢振興功労者として表彰。	1961年10月、日本童画会解散
1963年（昭和38年）	64歳	日本童画家協会の復活につき、武井武雄から入会をさそわれるが、盛岡にいては活動が出来ないとことわる。	日本童画家協会復活 「赤い鳥」全巻復刻
1964年（昭和39年）	65歳	３月、岩手大学教授を定年退官。軽井沢の堀辰雄の別荘をアトリエに借りる。	
1965年（昭和40年）	66歳	早稲田大学文学部講師に招かれ、デッサンの指導にあたる。45年まで務める。	
1971年（昭和46年）	72歳	「ゆきがふる」（キンダーブック）「むくどりのゆめ」」（キンダーおはなしえほん）	1973年初山滋永眠
1974年（昭和49年）	75歳	「こうまとじゅんちゃん」（キンダーブック）	
1977年（昭和52年）	78歳	◇「わらしべちょうじゃ」（フレーベル館）＊「鬼のよめさん」（日本放送協会）	
1979年（昭和54年）	80歳	＊「星へとんだ赤ハナのジジ」＊「うしかいとおりひめ」（日本放送協会）◇「北守将軍」◇「種山ヶ原」（岩崎書店）	
1980年（昭和55年）	81歳	＊「とっとりのふとん」（日本放送協会）	
1982年（昭和57年）	83歳	紅子とともに第三回岩手県勢功労者として表彰される。＊「おひゃくしょうとエンマ様」（日本放送協会）	1983年武井武雄永眠
1985年（昭和60年）	86歳	10月、県立神奈川近代文学館にて「日本の子ども文学展」開催「赤い鳥」の表紙画・口絵・挿絵などが展示。	
1986年（昭和61年）	87歳	県立神奈川近代文学館にて「赤い鳥の森展」開催、挿絵などが展示。	
1987年（昭和62年）	88歳	婦人之友社主催の「子供之友原画展」開催、挿絵が多数展示される。	
1988年（昭和63年）	89歳	11月、多摩美術大学美術参考資料館にて「深沢省三・童画の世界七十年展」開催。	
1989年（昭和64年）	90歳	5月、川徳デパートにて「深沢省三童画の世界展」開催。	
1992年（昭和64年）	93歳	死去	

◇ 単行本　＊ 紙芝居

4.「赤い鳥」と童画家「深沢省三」

深沢省三と「赤い鳥」の関係を語るとき、主宰者である鈴木三重吉との関係なくしては語れない。深沢省三と「赤い鳥」の出会いは、省三19歳の夏（大正７年)、東京美術学校洋画科に入学した年であった。夏休みに郷里の盛岡に帰省した省三は、書店の店頭に、創刊されたばかりの「赤い鳥」を発見し、購入した。その時の感激を省三はこう記している。

「鈴木三重吉主宰、清水良雄絵。童話のおもしろさだけでなく、華麗な絵、ことに表紙・口絵の美しさ、レベルの高さに、異常なまでの感激と憧れを覚え、切り取っておいた口絵を、上京のときに行李の底にいれておいたほどだ。」[7]

このような「赤い鳥」との劇的な出会いを経験した省三は、翌年、盛岡中学の先輩の清水七太郎から清水良雄を紹介された。自分の口絵まで大事にしているのを知って、清水義雄は若い挿絵画家を捜していた鈴木三重吉に省三を引き合わせた。そして、省三は1920年５月号（４巻第５号)「天狗のお仲間」(図１）から挿絵を描くことになったのである。

図１

三重吉と「赤い鳥」との交流は、この後、三重吉の死によって「赤い鳥」が終刊するまで、公私にわたって18年間続いた。

深沢省三が、初めて、清水良雄と会ったときの様子は、仙仁司が、次のように記述している。

「七太郎に連れられて西方町の清水良雄宅を訪れた深沢さんは小脇に数冊のスケッチブックを抱え込んでいた。「赤い鳥」の好評に気をよくしていた清水良雄は七太郎からの予備知識程度の話しは聞いていたが、ウマ・犬・牛・人物などがびっしり描かれたスケッチブックをめくっているうちに次第に緊張してゆく自分の姿を感じた。想像していた以上に見事なデッサンにしばらく魅せられてしまった。肖像画や子供の姿を主に描いてきた良雄には持ち合わせのない世界を見出し、直感的に「赤い鳥」のためにも重要な仕事になると感じ、三重吉に話を持っていった。最も信頼を寄せていた良雄の強い勧めに、「赤い鳥」童画陣に加えることをためらうことはなかった。このようにして動物童画家深沢省三はその一歩を踏み出すことになった。」[9]

「赤い鳥」では、清水良雄、鈴木淳、深沢省三、復刊後は、清水良雄の弟子の前島ともを加えて、４人の画家でほとんどの仕事をしている。当時「赤い鳥」の影響の下で、つぎつぎと創刊された各雑誌は、それぞれ専属の画家を置き、その特色をはっきりとうちだそうとしていた。「赤い鳥」は、清水良雄の卓越したデザイン感覚から生み出される装丁と、西欧風な画風の中に描き出す暖かな子ども像を特色としていた。それは、三重吉の考えていた新時代にふさわしい新しい芸術的な「赤い鳥」のイメージとぴったり合致し、装丁・表紙絵・口絵・挿絵全般にわたって清水良雄に全面的にまかされた（図２)。その信頼は、ゆるぎないものだったようで、解説「赤い鳥」には、

図２「赤い鳥」創刊号
表紙：清水良雄

「僕の仕事を大事にしてくれてね、あのやかましい三重吉が絵のことは自分の領域でないからと僕の分野へはただの一度も指図がましいこといったことなかったな、僕のおもいどおりにしてくれてね」[8]

と清水良雄の言葉が残されている。

しかし、「赤い鳥」のイメージは、清水良雄個人のカラーが全体的に支配しており、他の二人は、それを踏襲する事が第一番に要求され、自らの個性を十分発揮する機会はそうなかった。そのことは、特に初期の段階に顕著である。

「赤い鳥」時代の製作態度を深沢本人が次のように述べている。

「清水氏は、すでに『赤い鳥』の創刊号から華麗優美な表紙や口絵、挿絵を描いて、雑誌『赤い鳥』のスタイルを作り、日本中に多数のファンを持ち始めていたので、かけだし者の若輩の私などは、専ら『赤い鳥』のオリジナルをこわさないようにと心がけるばかりだった。」[10]

そして、また、「童画」を描く自らの姿勢について、こうも述べている。

「童画というものは、子供の神のような気持ちの絵、子供のような絵を描かなければいけない。子供の絵は神様だ。…子供の絵を描くということは、基本だけはしっかりやって、あとは、子供の神様のような気持ちで、何も考えないで、ああいう絵を描きたいというのが、私の一生考えていることなのです。」[11]

この言葉は、まさに、大正時代のほんの一時、童心を「汚れなきもの」「真っ白な心」「純真」「無邪気」「可愛らしい」と神聖視した教育思想のもとで、誕生した鈴木三重吉の「赤い鳥」の一翼を担った画家の言葉である。

5．失われた原画

子どもの文化あるいは文化財を研究するにあたっては、常に障害がつきまとう。歴史的に子どもの文化財は、消耗品として扱われる事がほとんどであった。よくあそばれた玩具、そしてよく読まれた絵本ほど消耗が激しく形として残っていないのである。このことは、子どもの本、特に絵本の世界では、大きな問題である。原画の消失は、展覧会の開催や画集の作成を困難にすることと同時に、画家が描いたままの絵画（イラストレーション）に触れる機会を失うということである。むろん《絵本》は、出版物として、印刷を通して人々にその内容を伝達する形式をとらねばならない、いわゆる《書物》の一ジャンルである。しかし、画家達が描いた印刷機を通らないままの色彩や筆のタッチに触れることができないのは、非常に残念なことである。それは、ページをめくることによって、物語（ストーリー）を楽しむ事とは異質の経験である。

現在では、絵本やイラストレターの芸術性が原画をも含めての評価となっている。

深沢省三の作品の場合は、とくに消失が著しい。彼は、「赤い鳥」に2750点余の挿絵を描いているが、ほとんどの原画は失われ、残っているのはおよそ120点のみと言われている。残存する当時の雑誌そのものも、全巻そろっていることはまれで、本研究も1963年の復刻版によってすべての雑誌に目を通す事ができた。

深沢省三画集に、仙仁司は次のようなエピソードを紹介している。

「妙な話であるが、当の画家達本人にしても、あれだけの苦労をして描き上げた作品なのに、一度手元を離れてしまえばこだわりはもたなかった。もっとも仕上がった作品は自らが鑑賞する間もなく赤い鳥社に渡り、その後は二度と戻ってこなかったので、そういうものだと思っていた。深沢さん自身ほぼ60年ぶりに自作の原画に接したとき、作品をジッと見つめている姿に、懐かしさがひとしお感じられているのかと思っていると、そうではなく、これが本当に自分が描いたものなのか信じられない。作品の上手さに吾ながら驚いてしまったと言ったきりまた画面に見入ってしまった。」[12]

従って、この消失の原因は、次の様ないくつかの理由が考えられる。

第一の理由は、さきに述べたように、童画が、文学よりも一段低い存在として認識されていた事にある。福田清人の定義を借りて言えば、

「《絵本》は、子どもがはじめてであう本であり、絵と言葉との調和統合による芸術形式の一つである。絵と言葉との有機的結合によって、絵でもない言葉でもない小宇宙が創造される。」[13]

であるにもかかわらず、日本においては、言葉（物語）のみが重視され、挿絵は、物語の添え物としてとらえられていた時期が長期にわたって続いていた。

このような状況は、鈴木三重吉が小説家出身の編集者であって、「赤い鳥」の内容についても、文章を練り添削する事のみに心をくだき、挿絵についてはその雰囲気が表現されていれば、それでよしと考えていた事によってもうかがい知れる。

第二に、深沢本人自身も、上記のエピソードにあるように、一度出版社に原画を渡してしまえば、手元に戻ってくることを期待してはいなかったことにある。

その他に考えられる要因に、転居を余儀なくされた時代背景もあげられる。略歴にあるとおり、深沢夫妻は、関東大震災及び第二次世界大戦を経験しており、戦後の作品を全て残しての蒙古からの脱出や故郷盛岡での生活と文字通り波瀾万丈の人生をおくっている。その結果のくりかえした「転居」も大きな要因であったに違いない。

おわりに

「童画家は社会的視野から、いち早く易々と埋もれていく。そういう社会は、浅い文化しか持たない。どこでその崩壊現象をくいとめるか。子どもの文化を私たちが厚く深くすべきなのである。」[14]

と瀬田貞二が30年も前に深く憂慮している。今はもうその瀬田も亡いが、「赤い鳥」時代の童

画家の評価も少しずつではあるが、正当な評価を与えられつつある。

本研究の今後の課題は、深沢省三の童画家としての軌跡を「子供之友」「赤い鳥」「コドモノクニ」それぞれについてたどってみたいと考えている。

また、その中で、後の深沢が表現した、蒙古での馬、スペインの闘牛、そして、幼い頃から好んで描いたとされる軍鶏等の、〈動物を描いた絵画〉を前に、「童画家」としての深沢省三との距離を分析するのも課題のひとつとしたい。

註

注１）E.Evanse(1826-1905)

注２）W.Crane(1845-1915)　R.Coldecott(1846-1886)　K.Greenaway(1846-1901)

注３）清水　良雄（1891-1954）　鈴木　淳（1892-1958）　深沢　省三（1899-1992）

引用文献

１）上　笙一郎・村松　定孝：日本児童文学研究、三弥井書店、1974、P156～166

２）福田清人：「『赤い鳥』総論」解説「赤い鳥」復刻版別冊１、日本近代文学館、1968年、P３

３）鳥越　信：日本の絵本史Ⅱ、ミネルヴァ書房、2003年２月

４）上笙一郎：児童文学事典、東京書籍、1988年４月、P504

５）上笙一郎：聞き書日本児童出版美術史、太平出版社、1974年、P83～84

６）上笙一郎：「『赤い鳥』総論」解説「赤い鳥」復刻版別冊２、日本近代文学館、1969年、P35

７）深沢省三：「鈴木三重吉氏　赤い鳥時代のこと」深沢省三画集、萩生書房、1989、P150

８）甲斐伸枝：「清水先生の思い出」解説「赤い鳥」復刻版別冊２、日本近代文学館、1969年、P21

９）仙仁　司：「深沢省三童画の世界」深沢省三画集、萩生書房、1989、P168

10）深沢省三：「『赤い鳥』の挿絵を描いて」深沢省三画集、萩生書房、1989、P151

11）深沢省三：「おもいいずるままに」深沢省三画集、萩生書房、1989、P157

12）仙仁　司：「深沢省三童画の世界」深沢省三画集、萩生書房、1989、P171

13）福田清人・原昌：児童文学概論、建帛社、1970、P57

14）瀬田貞二：「内外絵本作家評伝（3）」月刊絵本７月号、盛光社、1973、P15～16

参考文献

１）「赤い鳥」復刻版　別冊１～３、日本近代文学館、1968年～1969年

２）解説「赤い鳥」復刻版　別冊１～３、日本近代文学館、1968年～1969年

３）深沢省三：深沢省三画集、萩生書房発行、1988年11月

４）上　笙一郎：聞き書日本児童出版美術史、太平出版社、1974年７月

５）上　笙一郎：児童出版美術の散歩道、理論社、1980年11月

６）瀬田貞二：絵本論、福音館書店、1985年11月

7）中村悦子：幼年絵雑誌の世界、高文堂出版社、1989年７月
8）鳥越　信：日本の絵本史Ⅰ、ミネルヴァ書房、2001年12月
9）鳥越　信：日本の絵本史Ⅱ、ミネルヴァ書房、2003年２月
10）鳥越　信：日本の児童文学史、ミネルヴァ書房、2001年月
11）日本交際図書評議会編：子どもの本　1920年代展図録、1991年４月
12）西田　良子：日本児童文学研究、牧書店、1974年５月
13）月刊「絵本」、1973年７月号、盛光社
14）月刊「絵本」、1974年1月号、盛光社
15）「太陽」、1979年２月12日、平凡社
16）別冊「太陽」、1988年5月24日、平凡社
17）上　笙一郎・村松　定孝：日本児童文学研究、三弥井書店、1974年10月
18）日本児童文学学会編：児童文学事典、東京書籍、1988年４月　　深沢省三　その１

Summary

Shozo Fukazawa is one of pioneering illustrators of picture books for children. He started his career as one of three main illustrators for 'Akai-tori' (Red Birds), the first picture magazine for children founded by Miekichi Suzuki in 1918. Unfortunately, most of 2,750 original illustrations drawn by Fukazawa had been lost. This should be partly due to the general tendency that illustrations had never been appreciated as texts in those days in Japan. Even Fukazawa himself did not seem to be attached to his own illustrations. Thinking about his lost original illustrations, I have summarized his brief history and considered the role played by this rarely appreciated illustrator.